

日本の風土を、 未来につなぐ。

日本の美しい自然、その風土が育んだ産業、伝統、文化。
類まれなその豊かさは、都市と森の分断により急速に失われつつあります。

これから都市と森は、どう関わるべきか。
次世代に、何を残せるのか。

都市と森が「共同体」として息づきながら、再接続するために——
「ものづくり」にはその力があると信じて、

地域と場所の関係性をデザインし、日本の風土を未来につなぎます。





株式会社スペースアンドプレイス
代表取締役

戸田 光貴 (とだ みつたか)

1985年 埼玉県出身

2014年 株式会社ワイス・ワイス 入社
国産材を利用した家具・什器の製作、伝統工芸品のディレクションに従事

2023年 株式会社スペースアンドプレイス 設立
株式会社東京チェンソーズ 参画

分断による2つの喪失

国産材の自給率は40%を超えた。その裏で置き去りにされる「里山」の木材と周辺の産業。里山が育んできた、2つの地域資本、「自然・環境的資本」と「産業・技術的資本」が失われている。

なぜ分断は起きたのか？ / 戦後の拡大造林から高度経済成長、木材の輸入自由化がもたらしたもの

戦後～高度成長期

1950s — 1970s

国土再建のため、全国で拡大造林を推進。
杉・桧の人工林が急速に拡大し、現在の人工林約1,000万haの基盤が形成された。

輸入自由化の波

1964 —

木材の輸入が全面自由化。
安価な外材が流入し、国産材の価格は崩壊。山元の立木価格は暴落した。

林業・産業の衰退

1980s — 現在

採算が取れない森は放置され、林業就業者は約50万人から約4.4万人へ激減。外材に依存し、森と都市をつなぐサプライチェーンが途絶えた。

Fact data

自然・環境的資本の喪失

約370万ha

伐採を考えていない森
(農林水産省: 森林資源の循環利用に関する意識・意向調査)

3,772種

絶滅危惧種
(環境省レッドリスト2020)

産業・技術的資本の喪失

約1/10

林業就業者数の数
約50万人→約4.4万人
(1955→2020年)(林野庁)

約1/5

製材所の数
約18,000カ所→約3,800カ所
(1960年代→2022年)(林野庁)

生物多様性の保全者は、「里山の暮らし」だった

亜寒帯から亜熱帯まで、わずか3,000kmの列島に多様な気候と生態系が共存する日本。
人の手が入ることでその多様な里山環境・生物多様性が保たれ、産業・伝統・文化が育まれてきた。

かつての暮らしと、里山のつながり例

炭焼き・薪炭業



暮らしとのつながり
↳ コナラ・クヌギの、
「薪炭利用」

かつて燃料が石油に変わる前、人々は里山のコナラ・クヌギ等を薪炭として活用していました。木を定期的に伐ることで森の「藪化」を防ぎ、林床に光が差し込むことでその環境がギフチョウやオオムラサキなどの生きものの住処となっていました。

対応している生物種

ギフチョウ / 絶滅危惧Ⅱ類

和紙(紙漉き)



暮らしとのつながり
↳ コウゾ・ミツマタの、
「栽培管理」

和紙の原料であるコウゾ・ミツマタは、沢沿いの半日陰で栽培・管理されていました。ゲンジボタルは、水が澄んでいることに加え、幼虫のエサとなるカワニナが生息できる水辺の草地環境を必要とします。和紙づくりの営みが、その環境を結果的に支えていたと考えられるのです。

対応している生物種

ゲンジボタル / 地域絶滅危惧

茅葺き・草刈り



暮らしとのつながり
↳ 茅場(カヤバ)の、
「定期的草刈り」

かやぶき屋根の材料をとるために、茅場では毎年定期的な草刈りが行われていました。この草刈りによって見通しの良い開けた草地環境が維持されており、猛禽類は上空から獲物を視認できたのです。猛禽類は開けた環境がなければ狩りができません。茅を刈るという生活の営みが、猛禽類の生息地を守る行為だったのです。

対応している生物種

サンバ / 絶滅危惧Ⅱ類

「再接続」を進める、リジェネラティブ アプローチ

調達の力で里山の持つ本来の「機能」を取り戻し、
2つの地域資本を持続可能にする、CSV的アプローチ。

森へのアプローチ方法

CSR的アプローチ - 産業を経由せず、直接森へアプローチする



KEY INSIGHT

CSRの限界

予算が続く間しか続かない。
中間の産業を経由しないため、文化・技術が失われる。
森が豊かになっても、木を伐ることも、板にすることも出来ない。

CSVの力

事業が続く限り続く。
需要が川上に遡上し、各層の産業を生きし続ける。
森の価値を「取り出す」ことが出来る産業を持続可能に。

3つのBenefitを生む、 国産木材「サプライチェーン構築サービス」

最大のBenefit=コストの最適化を図りながら、地域・里山との関係性を育む。

従来の産業モデル

不透明な情報・サプライチェーン

森・生産者

製材・乾燥・加工

地域材コンサル会社

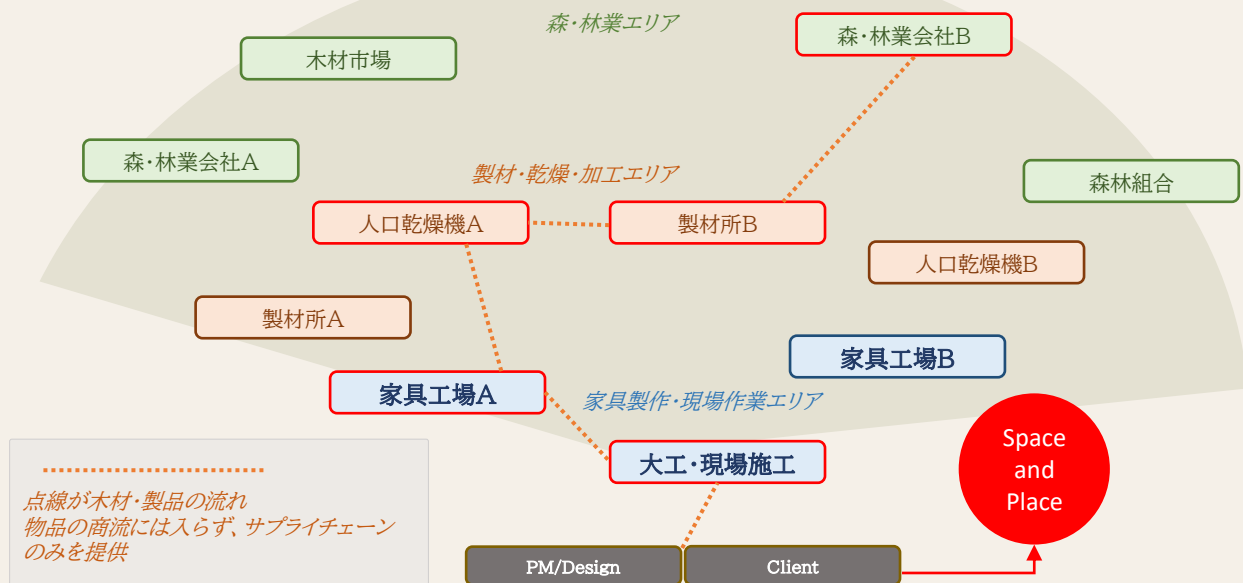
マージン/情報遮断 中間マージン3~4割

設計・施工

施主

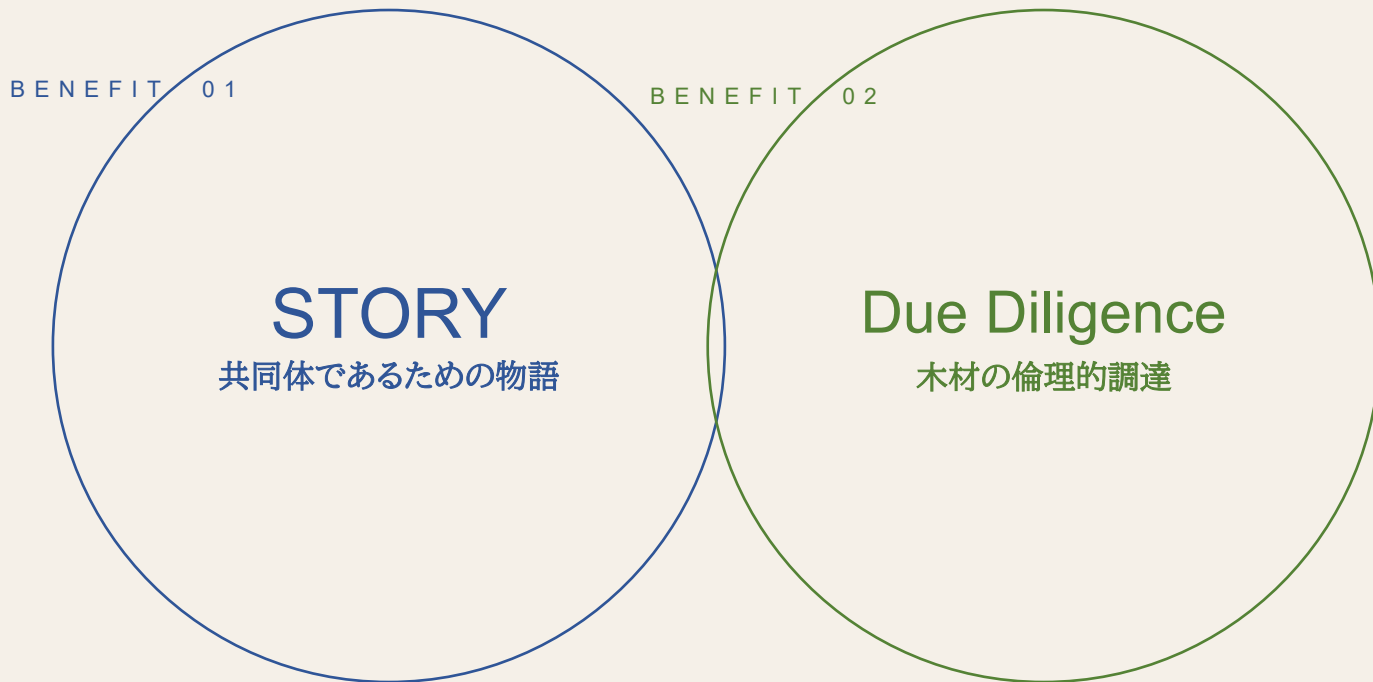
Space and Place モデル

プロジェクトごとに最適なサプライチェーンを構築し提供する



企業の国産木材調達を「両輪」で前進させる

最適なサプライチェーンが生む、2つのBenefit。



STORY

共同体であるための物語

「物語」が組織を強くする

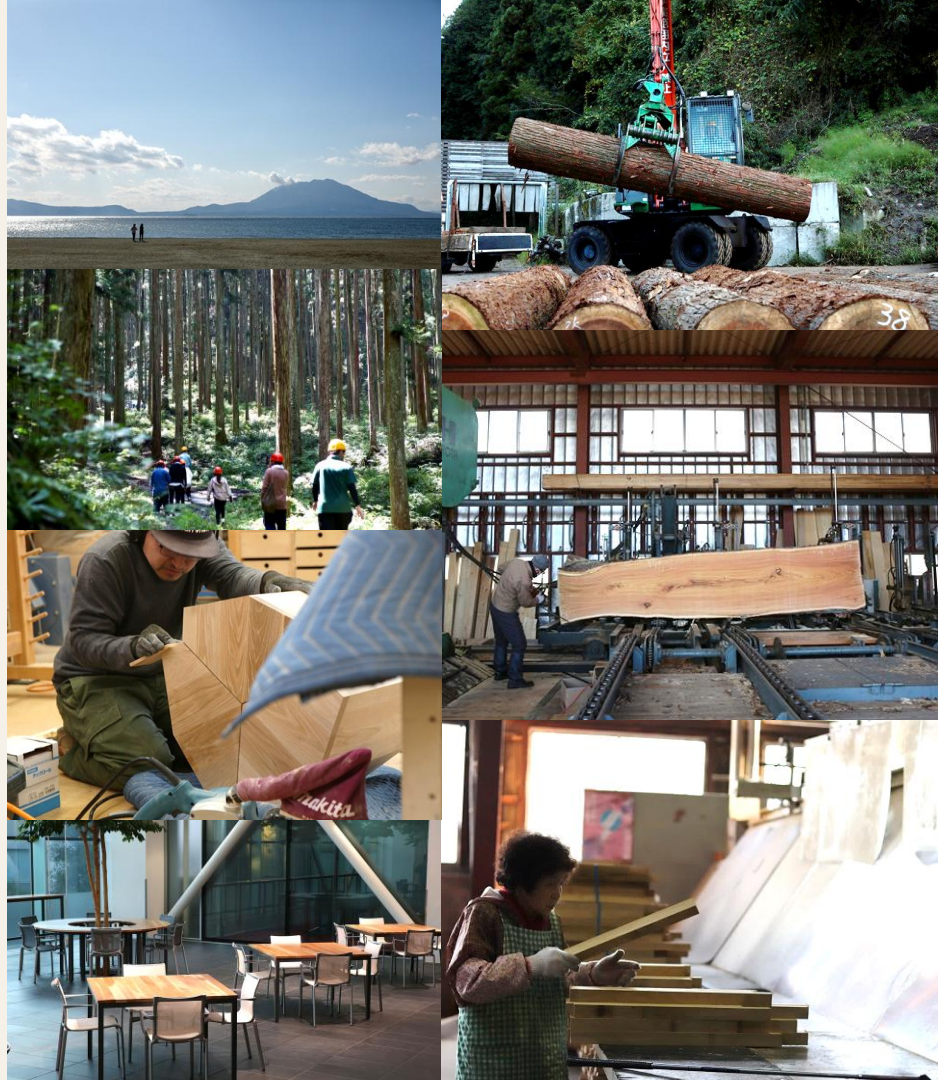
川上の林業家から川下の施主まで、最適なサプライチェーンで繋がり、プロジェクトに関わる人が同じ物語を共有する。

「調達」という行為そのものが、明確なサプライチェーンを通じて物語を介する事で、チームを「共同体」へと変え、様々な恩恵をもたらします。

しかし「ものづくり」が地域社会へ与えるインパクトは大きく、方向を誤ると規模の小さなものづくりの会社や、地域社会は予期せぬ影響を受けてしまいます。

スペースアンドプレイスの役割は地域の伝統や文化を重んじながら、お客様と地域の橋渡しを行っていく事です。

現地を訪れ、知る・学ぶ・体験する・対話する、お客様の様々なフェーズに合わせ、地域との関係性を共に育んでいきます。



代表メッセージ

古来より、日本人は祭りを通じて自然と関わり続けてきました。
五穀豊穡を祈り、豊漁に感謝し、疫病の退散を願う。その営みを支えたのは、御神輿を彫る職人であり、提灯を作る紙師であり、注連縄を綯う農家でした。
かつて祭りの道具は、里山の木・竹・漆・和紙・藁などから生まれていました。
つまり祭りとは、自然と人間の関係を、産業と文化を通じて維持し続けるための装置だったのです。
しかしそれは今、静かに失われつつあります。

戦後の拡大造林と、木材の輸入自由化、そして高度経済成長を経て、森と都市をつなぐサプライチェーンは途絶えました。林業就業者は70年で約10分の1に。伝統工芸の従事者は5分の1。管理する意向のない人工林は国土の10%を覆い、3,772種の生きものが絶滅の危機に瀕しています。しかしそれは時代の要請の中で、この国を支えてきた方々が懸命に生きてきた結果であり、誰も悪者にはできません。

私がこの会社を始めたのは、ひとつの確信からです。
「調達」という事業行為そのものが、森への最も持続的な参加になる、という確信です。
企業がものをつくるとき、何をどこから買うかを選ぶとき、その一つの選択が川上の林業を生かし、製材所の職人を守り、伝統工芸の技を次世代につなぐ力を持つ。事業が続く限り、需要は川上へ遡上し続ける。それがCSVの本質だと思っています。

日本の伝統技術は、産業の中に多く残っています。産業が消えれば、技術の継承・継続が難しくなる。
技術が消えれば、祭りの道具も作れなくなる。
そして祭りが消えれば、自然と人間の関係を結ぶ糸も断ち切られてしまう。

私の仕事は、木材のサプライチェーンを設計することです。
そしてその先にあるのは、都市と森の「再接続」であり、日本の風土が何百年もかけて育ててきた文化の継承です。大げさに聞こえるかもしれませんが。
しかし私は、ものづくりの現場に立つたびにそれを確信しています。
私たちの故郷であるこの国を、再び強く、後世につないでいくために、

地域と場所の関係性をデザインし、日本の風土を未来につなぎます。



お問い合わせください

メールにてお問い合わせいただいた方に、料金プランなどを掲載した完全版の資料をお送りしております。
みなさまとお話しできる事を楽しみにしております。

お問い合わせ先: toda@spaceandplace.co.jp